

### 3. 田中家の人びと～二代目の妻・明子～

#### 呉服屋の箱入り娘、20歳でタオル屋の嫁となる

田中明子氏は、1934年、今治市本町1丁目に店を構える丸五呉服店<sup>まるご</sup>の3人兄妹の末っ子として生まれた。本町周辺は今治銀座と呼ばれ、1丁目は銀座和光<sup>わかくら</sup>が鎮座する東京の銀座4丁目に匹敵すると明子氏が自負するほど、1980年代頃まではたいそう賑やかな場所であった。

明子氏は、創業1887年の伝統ある呉服店の長女として、商家独特の雰囲気の中で華やかに大切に育てられた。父親が1946年に亡くなるまで、経済的にも恵まれた環境にあり、地元の今治市立美須賀小学校、同美須賀中学校を卒業したのち、1941年に今治町立今治高等女学校、愛媛県立今治高等女学校を前身にもつ愛媛県立今治北高等学校の第1期生として進学した。



現在も営業を続ける丸五呉服店

幼少時のエピソードを一つ挙げると、洋風の洒落た食べ物がよくテーブルに並んでいたことである。家には、店主、番頭、家族、お手伝いさんが居て大所帯だったが、長いテーブルに皆が並んで座り、ワッフルやケーキなど当時では珍しい食べ物を母親とお手伝いさんが料理して出していた。ちなみに明子氏の母親・ヨシノ氏は今治高等女学校の卒業生であり、同校の8期生にあたる。

今治北高等学校を出たあと、1953年に商家の箱入り娘は共立女子大学短期大学部家政科に入学し東京での生活をスタートさせた。父親は明子氏が小学校6年生のときに亡くなったため、家計的には以前より苦しくなっていたが、次兄の勝美<sup>かつみ</sup>氏が援助してくれた。次

兄のおかげで短大に進学し東京で生活できたことは、今でも深く感謝している。また、長兄の<sup>よしなか</sup>義孝氏は、松山商業の野球部で活躍したあと早稲田大学に入学し、その後日本航空に入社したエリートであった。しかし、幹部候補生として戦争に召集されて満州に送られ、終戦直後に明子氏たちが疎開していた朝倉（旧越智郡）に突然帰還した義孝氏は、その1週間後に病死した。幼かった明子氏は、そのときの状況をよく把握できなかったが、今おもえば、戦地で病気になって後送され、無事に日本に戻ったがもう長くはなかったのである。

短大に入学して1年が経った頃、明子氏の人生にとって大きな出会いがあった。将来の夫となる田中一久氏との出会いである。そして、一久氏とのお見合いの話がまとまり、そのまま20歳で結婚した。大学は1年しか通わなかったが、友だちに恵まれ、現在も同期会に出席して年に一度の東京を満喫している。

結婚後、田中家の人間としての生活が始まった。田中家では、「長男家族とは別の屋敷に住む」、「女性は仕事に従事せず家を守る」という田中産業の創業者・良太氏の方針による独自の慣しがあった。よって、今でも明子氏はタオルづくりの「いろは」については何もわからない。しかし、明子氏は、冬の時期に朝早くから工場に出向き火鉢に炭火を起こして暖房の準備をしたり、昼休みに従業員のためにお茶の用意をしたり、残業で遅くなった日は従業員に夜食を準備したり、工場の従業員を献身的にサポートした。従業員は、月二回の休み以外は毎日、朝の7時から夜の6時45分まで工場働いていたから、それに合わせて明子氏も皆のお世話をした。何より、明子氏の生まれ持った明るさが周りの人




結婚当初の一久氏と明子氏

を元気にした。

田中家の家訓「女は前にでるな」に従い、明子氏は経営やタオルづくりに携わることは一切しなかった。あくまで陰で支える存在であったが、家族同然の従業員のお世話をすることで、明子氏も立派な「タオルびと」の一員であった。内助の功として一久氏を支え、田中産業と東洋繊維協同組合の発展を側にいて補助した。

#### 4. 田中家の人びと～二代目の次女・愛子～

田中愛子氏は、1960年、二代目の一久氏と明子氏の次女として、今治市旭町4丁目の田中産業(株)旧工場の敷地内にあった自宅で誕生した。明子氏が26歳のときの子供である。この周辺は、ハリソン電機(株)  があった場所としても有名であり、3歳までここで過ごした。愛子氏の上に姉の文子氏と兄の正規氏がいる。



生後100日目

明子氏に抱っこされた愛子氏



2歳頃

一久氏に抱っこされている愛子氏

地元の今治市立日吉小学校、日吉中学校をへて、愛媛県立今治西高等学校に進学し、高校を卒業するまでの18年間を今治で過ごし

た。その後、青山学院大学に進学するが、受験した学部は経営学部だった。今となってはそれも運命だったかもしれないが、当時は「たまたま受験日とその日しか空いてなかった」ため、経営学部を受験したそうである。大学進学を機に今治から東京へ生活の場が変わり、学生寮と下宿の半々の生活を送った。



兄の正規氏（左）、姉の文子氏（中）

大学卒業後、青山学院大学の職員として2年間働いたあと、帰郷して田中産業の事務職員となり、愛子氏はこのとき初めてタオル業界に足を踏み入れた。

しかし、田中産業の事務をしていた5年11ヶ月、当時は現場のことをまったくと言っていいほど知ることはなかった。その背景には、田中家の家訓である「女たるもの前に入るな」があったからであり、タオルづくりの現場にしても経営にしても、いっさいタッチしなかった。



高校時代

弓道部で活躍



20歳の記念写真

そして、3年間のブランクののち、1993年に現在の東洋繊維協同組合に経理担当者の後任として入社した。2003年、「女たるもの前にできるな」の家訓に反して、愛子氏が東洋繊維協同組合の代表理事に抜擢されたのは、東洋繊維協同組合の代表であった父親の一久氏が亡くなったこと、父親の継承者がいなかったことからである。

一久氏の跡を継いで代表理事になった愛子氏であるが、父親の死後、後ろ楯を失くしたことは大きかった。たとえば、取引先との商談において、一久氏がいた頃は取引先から無理難題を押し付けられても、いったんその話を持ち帰り一久氏に判断を仰ぐことができたが、頼る人がいなくなると形勢不利な状況にしばしば陥った。男性社会の業界において後ろ楯を失い、取引先から商談後に即答を迫られる場合も少なからずあった。しかしその他は、銀行からの借入れ書類の代表者氏名が「田中一久」から「田中愛子」に変わったくらいで、仕事内容に一切の変更はない。ただただ、父親のやってきた仕事を繋いでいくことが愛子氏の使命である。

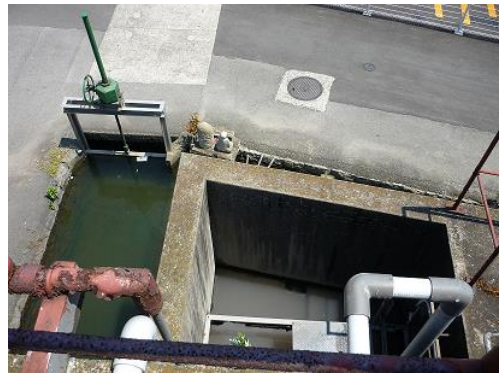
「今こうしてあるのは『棚ぼた』的な運であり、父親が亡くなって他に選択肢はなかった」と愛子氏は言う。現在、愛子氏が代表理事として東洋繊維協同組合を引っ張り、また愛媛県繊維染色工業組合の副理事長として晒し場業界の将来を見据えながら新しいことにとり組んでいる姿勢をみると、けっして「棚ぼた」的な運ばかりでないのは明白である。

先述した「MADE IN IMABARI（今治製）」のプロジェクトもそうであるが、晒し場から情報発信していけるように、先を見据えた活動も多忙の合間をぬってとり組んでいる。環境問題もそのひとつである。染晒加工は「水」が命である。作業工程において入口も出口も水は欠かせない。とくに、出口、つまり排水処理については環境に配慮している。工場の屋上にある排水処理施設では、薬剤（希硫酸などの排水処理剤）ではなく菌（酵素）を使って自然浄化させている。浄化した水は近くの川に流されるが、ほとんど無害である。

逆に、川の水よりも透明度が高い。



工場の屋上にある排水処理施設



浄化した水を水路に流す

タオル業界の将来について、愛子氏は「タオルは飛躍的にこれから発展する産業とは、わたしはおもっていない。衰退することはあっても発展はおそらく望めないとおもうけれど、シンプルに皆で普通に食べていきたいですね。自分だけがいいんじゃないじゃなくて皆が、贅沢はできなくていいんです。普通に食べていけるような、そんな風に商売が続いていったらいいとおもいますね。次の時代に渡せるように。」愛子氏が謙虚にもそう考えるのは、経営者は従業員とかれらの家族に対して責任があるからである。「たとえば、パートのおばさんを一人でも雇うときは、この人を定年まで面倒を見る覚悟で雇います」と愛子氏は断言する。

「糸へんで生きている」からこそ、タオル業界の将来を愛子氏は必死になって考える。以前、タオルソムリエの受験の際に、「晒し場がこれから生き残っていくためにも、『晒す』という言葉<sup>おき</sup>を筆頭に『箴』<sup>おき</sup>や『梱』<sup>こり</sup>、『刃』<sup>もんめ</sup>など古い業界用語を改め、誰もがよく使う用語に置き換えていくのも一考である」と、冗談半分、本音半分に愛子氏はおもっている。タオル業界独自の言い回しも見方を変えれば面白いかもしれないが、若い世代に興味を持ってもらい、どれだけ多くの人をとり込めるかが、タオル業界の将来を左右する。今日も明日も

明後日も、3K の職場でもくもくと働く愛子氏は、女性ならではのセンスと控え目だが熱い情熱を持ってタオルづくりと向き合っている。（次号につづく）

